



古道を訪ねて ③

西国街道・新家地区



6月1日号で紹介いたしました小野原地区から西へ進み、新家地区へ入ると、街道は約400mにわたりほぼ一直線になります。小野原地区も古い町並みが残っていますが、新家地域では、直線の道と時代を感じさせる民家が、独特の風情を感じさせてくれます。道の脇にたたずむ石仏や、軒先にいくつもの桶をつり下げた民家(写真①)などを見学しながら進んで行くと、石畳風に整備されている箇所にとどります。やがて右側に「勝尾寺」の額が架かった石の大鳥居が見えてきます(写真②)。現存する鳥居は、柱に刻まれた銘から、寛文六(1666)年に建てられたことを知ることができ、勝尾寺に残されている古文書には、寛元三(1243)年に、木の鳥居が建てられたこと、その後何度か、再建や修理が繰り返されたことが記録されています。道が整備された現在では、勝尾寺へ参拝されるほとんどの人が、自動車を利用するようになり、北へ向かう表参道を多くの人々が利用しました。鳥居の左側には、江戸時代に建てられた町石があります。そこには寺までの距離「三十六町」と寄進者の名前が刻まれています(三十六町Ⅱ約4km)。



▲写真①



▲写真②

また、鳥居の左側には、2基の石柱があります。1基は、ここから山の上の総門までの三十六町の町石を寄進したことを示すもので、「大坂内淡路小嶋屋長左衛門後室(未亡人)」の寄進者銘が刻まれています。もう

一基は道標です。正面に「左勝尾寺」「階堂道」右面に「圓光大師御遺跡」「二五箇所第五番」の銘があります。「圓光大師」は、浄土宗の開祖「法然上人」のこと、勝尾寺の二階堂に約4年間滞在したことから、浄土宗の信者がここに道標を建てたと考えられます。

